



## 伝統的基礎学問

川合 慧

(東京大学)

kawai@graco.c.u-tokyo.ac.jp

扱うものが百個の場合に妥当な処理方法が、一万個になるとかなり怪しくなり、百万個になると非現実的になる。日々の情報処理の場面で普通に生じる状況である。ところがこのことは、情報に関する素養のない人にとっては、埒の外であり、思いも及ばない。通常の教育では規模の違いを捨象して、「本質的ではないちょっとした大きさの違い」と思い込むように訓練されているからである。扱う問題の複雑さの規模についても同様であり、SDI (Strategic Defence Initiative) や脳波によるコンピュータの制御などが、まともな検討対象として取り上げられることになる。複雑な問題の現実的な解決方法については、それを検討するにも単に評論するにも、情報の素養が絶対に必要である。

ここで「情報技術は教育に値するか」と書くと、何をバカなことを、と言われそうである。情報技術とそれがもたらしたものの重要性は、万人が認めるところである(であろう)。しかしその教育となると、議論の情景が一変する。なぜか、それは人間、それも教える側の人間と教わる側の人間の双方がかかわってくるからであり、特に教える側の状況が千差万別複雑怪奇だからである。この状況は、専門家向けではない、一般人向けの情報教育においてますます顕著となる。

「伝統的基礎学問」という言葉がある。「伝統的」に皆が「基礎である」と認めている学問、ということだろうか。この言葉を聞くと、壮大な石造りの聖堂の中で、ひたすら毛織いをしあっている一群のマントヒヒを、なぜかイメージしてしまう。この言葉は、たとえば「高校までは伝統的基礎学問に関する教育だけをみっちりやるべきだ」

とか、

「大学入試は伝統的基礎学問に限るべきだ」

とか、

「伝統的基礎学問の教育者増員を！」

という具合に使われる。人間誰しも、自分の経験からは逃げられない。「伝統的基礎学問」論者が持つイメージも、大方は自分が受けてきた教育内容と教育形態から形造られているのだろう。

ところで、中学・高校の国語の教科書を覗いてみたことがあるであろうか。目次には、いわゆる「伝統的な読み物」や文法事項に混ざって、以下のような項目がある。

- 話す、聞く、分かりやすく書く、分かりやすく話す、情報を集める。
- 討論、メモ、インタビュー、調査・分析する、ニュース番組を作る。
- 論理的に分析する、聞き上手になる。

これらは指導要領に沿う内容なのだそうで、指導する側の能力の問題はあるにせよ、時代は変わりつつあると思わざるを得ない。「話し方」1つを取っても、

- 全体像を先に話す
- 項目立てして話す
- 最後にまとめをつける

といったことに取り組む教育へと走り出しているのである。外国語や理科・社会についても、同様な方向が取り入れられている。

数学は、多様な諸問題の中に存在する数理構造について、その現実的な意味ではなく構造自体の意味を追求することによって、あふれんばかりの成果を達成し、数学的思考方法を確立してきた。そして「伝統的基礎学問」の地位を手に入れた。これに対して「情報」は、同じく種々の計算構造の意味を追求するとともに、現実世界のモデル化とモデルの解釈の両面において、情動的思考方法とも言える考えの進め方の確立を目指してきた。上記の教科国語における「話し方」はそのほんの一例にすぎないし、今年度から開始された高等学校の教科「情報」は、まさにその方向を指向している。

それでも、情報がいわゆる基礎学問と認められるには「千里の道」の感がある。それは、単なる計算技術と計算構造・意味の処理との区別がつかない、「情報に慣れていない人々」の「世論」の強い影響によるものであるが、情報の思考方法と表現方法という側面の価値を認めようとしない、「情報に慣れている人」の声も、無意識にはあろうがそれに加担しているように思えてならない。

一般人に対する早期の情報基礎教育は不要であると主張する人々に、以上の状況を一考していただきたいものである。

(平成15年11月4日受付)

